

## 「2023年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学人間環境学研究所1年 秋山 ゆい

今回参加した、香港中文大学サマースクールは、私にとって非常に有意義で学び多き時間であった。まず今回の留学で、留学と異文化理解について、新たな視点を得ることができた。元々このプログラムに対して、私は様々な国からの学生と交流することを想定していた。しかし、実際には、プログラム参加者は8割以上が日本人であり、クラスメートは13人中10人が日本人、寮のルームメイトも日本人で、想像していたよりもずっと日本語が通じる環境が待っていた。正直にいうと、初めはかなりがっかりした。日本語が通じてしまうなら、留学に来た意味がないのではないかという気持ちになったからだ。しかし、実際には日本人同士でも異文化理解は十分に起こるということを学ぶことができた。私の部屋はありがたいことに問題はなかったが、別の部屋では日本人同士であっても問題が起きたり、価値観の違いに戸惑ったりということが起きていた。それらを見ながら、日本人であってもそれぞれが持つ文化は異なり、こうして異国で生活を共にすることで、互いに歩み寄ることを学ぶ機会を得ることができるのだと強く感じた。この体験から、留学に行ったからといって外国人との交流にだけ焦点を当てるのではなく、そこで会う全ての人々との交流を大切にすることが必要であるという気づきを得ることができた。

次に、香港という街及びそこに住む人々を、私からの視点ではあるが、知ることができた。私にとって今回が初めての香港滞在であり、香港へ行く前に持っていた香港へのイメージは、非常に発達していて高層ビルが立ち並んだ都会的な街であった。しかし、実際に到着した時の香港に対する第一印象は、「なんて自然が多いのだろう」というものだった。また、香港人のテンポについても驚くことがあった。駅のエスカレーターは、日本とは比べ物にならないほど速く、一体事故が起こることはないのだろうかと疑問を感じずにはいられなかった。また、飲食店に入った際にも、注文をしてから料理が出てくるまでの速さが非常に速く、また食べ終わると会計を急かされることも少なくなかった。この点に関して、中文大学の生徒との交流会の際に、現地学生のプレゼンテーションで、「香港人のテンポはいつでも“快”、“快”、“快”です。」という言葉聞いた時、非常に納得ができた。しかし一方で、現地の先生や学生と話している時、街でお店の店員と会話している時、はたまた電車の中やショッピングモール等で現地の人を観察している時に、私は香港人の持つある種の独特な、のんびりとして、おらかなテンポをしばしば感じるがあった。まるで未来という概念が全くなく現在だけを生きているような、非常に人生に対して楽観的で余裕があるような、そんな印象を受けた。具体的な説明をしようとすると非常に難しいが、例えばこちらが何を頼んだとしても、「いいよ、いいよ、やってあげるよ。」という返事が必ず返ってくるような、そんな感じであった。このおらかなさは、香港という街が歴史的に様々な文化や言語を受け入れざるを得ない環境に置かれていたからこそ生まれたのではないかと私は憶測している。様々な文化や人との共存が日常的であったからこそ、自然と他者への寛容さを持つようになったのではないかと感じている。

またプログラム内容は、非常に充実したものであると感じている。香港の学生と関わる機会も多く、香港観光や文化体験など、香港でしかできない体験がたくさん盛り込まれていた。授業を教えて下さった先生方も非常に優しく、気さくで、一緒にご飯に行ってくださいる機会も多かった。

このプログラム参加によって、自身の進路にもまた影響があった。プログラムに参加して、将来必ず、中国語で本を書こうと思うようになった。というのも現地の先生に、そう勧められたからだ。正直、中国語で本を書くななんて今まで考えたことがなかったので、初めはびっくりしたが、今は教えて下さった先生への恩返しのためで書こうと思うようになった。

以上が、今回のプログラムを通して私が感じたことである。